

---

With You...

あやぽん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

With You...

### 【Zコード】

N4445A

### 【作者名】

あやぽん

### 【あらすじ】

ただ誰かに必要とされたかった。偽りの心。壊れてく自分。本当の自分が分からなくなる…自分の明日に夢も希望も無かつた少女が本当に大切な物を見つける…心の変化を描いた物語です。

## プロローグ

ただ誰かに必要とされたかつた。  
それだけなのに、なぜいつも空回りするの？

誰かが言つた。

「ねえ。愛音つて悩みとかないでしょー？」

「いつもぼーっとしてるって言つたか…。幸せそうだよね。」

「良いよね。愛音は、悩み事なさそうや。」

誰も分かつてない…誰も知らない…。

本当は、私だつて悩み事の一つや二つあるんだよ…けれど…言いたいのに、言えない…。

それは、自分が臆病すぎるから。

嫌われるのが嫌で、昔からいつも周りの意見に合わせて生きてきた。  
気が付けば、私は「意思のない他人の意見に流されやすいひと」になっていた。

こんな人と一緒にいても、おもしろ味が無いだらつ。今だから思える。

でも…あの頃の私は、あれで必死だったんだ。

## 第一章

小学生の時。

私の通っていた小学校は生徒人数が少なく、クラスも一クラスしかなかつた。

そんな小さなクラスでも当たり前の様に嫌われ者はいた。

昔から喘息がひどく、入院ばかりしていた私はなんとかクラスの輪に入ろうと

いつも、周りに気を使つていた。

ある日、仲の良かつた友達から、何かがキッカケで  
「本当は愛音… クラスの女子に嫌われててさ。…」  
と言われた。

一瞬、頭の中が真っ白になつた。  
けれど、

「あ…！…そうだったの〜！」と笑つて誤魔化した。  
「やっぱり、愛音つてそんなの気にしないんだね〜！」と、  
うらやましがられたのを今でも覚えている。

本当は言葉に言い表せないほど、ショックだつた。  
今まで、皆の気に障らない様に、接してきたのに  
「なぜ？」と言う疑問と同時に  
クラスの子達に対する憎しみと  
自分に対する憎しみが生まれた。

六年生の時、環境の悪さを理由に引っ越した。

転校先では人に嫌われないよう、今までより必死になつていてる自分がいた。

心の何処かで人を信じられない思いも生まれた。

気が付けば、人の意見に流されてばかりで、何事にも興味の無い人間になっていた。

趣味もなければ、特技も無い。

ただ「言われたからする。」と言つ日々が続いてた。

卒業文集の「将来の夢」なんか、明日の楽しみも無い私に書ける事なんて無かつた。

結局、内緒で友達に書いてもらつた。

日々の生活はどんどん

偽りの心で塗り固められ、

本当の自分が何か判らなくなつてきていた。

## 中学

部活動も友達に誘われて、一緒に入つた。  
運動嫌いな私だつたけれど、  
柔道部に入つてた。

「愛音、柔道部入つたの～！？すごい意外なんだけど～！～！」

私自身もそう思つ…。

吹奏楽部も誘われてたのに、なぜだろ？  
今考えても思い出せない…。

けれど、

この選択は間違つてなかつたと今でも思つよ。

あんなに大切な人達と出会えたんだから。



## 第一章

柔道部に入部してからと書つもの

毎日が楽しかった。

先輩や、顧問の先生、皆に心が開けた気がしていた。  
そして、何よりかけがえの無い友達が出来た。

ドタバタと騒がしい足音が聞こえる。

「あいぼ～！～！」

ミイだ！～！

ミイとは、部活を通して出会い、仲良くなつた。

ミイの第一印象は、活発なイメージ。

第一印象の通りに活発で明るい子だった。

茶色の髪に大きな口。

自分の主張はハツキリ言える、そのうえ場の空気も読めるし本当に頼り甲斐がある。

けれど、少し臆病なところがあった。私達は少し、似たもの同士だったのかも知れない。

ミイ：「今日はアタシ、廊下で山野先輩と会つたヨ～！～！」

愛音：「ええ～！～！うそ～！～？ミイだけズルいよ～！～！」

ミイ：「やっぱり、ワタクシの運命のヒトだわサ！～！」

愛音：「絶対、ナイよ～！～廊下で会つたくらいで…あ・り・え・な・い・ッ！～！」

その頃、私達は、同じ部活の一つ上の先輩、山野先輩に惹かれてた。  
部活の中でも一番と言つていいほど、背が高くてスタイルも良く  
私達二人は、ほとんど一目惚れだった。

何事にも真剣な眼差し、  
爽やかな笑顔、  
本当に憧れの人だった。

私とミイは、毎日一人でウルサイくらい、山野先輩の話で盛り上がり  
時には鼻血を出したり…と、漫画をながらの楽しい毎日を送ってい  
た。

しかし、ある日…ミイが集団リンチにあった…。

しかも、私の目の前で…！

本当は…事前に知つていながら、止めなかつた。

いや…止めなかつた。

やっぱり、人に嫌われるのが怖くて。

あの頃の私は、一番大切なものが何か判らなかつた。

それはきっと…いつも当たり前の様にすぐ側に居たから。

それからと言つもの、ミイはしばらく学校を休んだ。

私は、なんだか…いつも心に穴が開いている様な感じで。

日々が経つにつれて、ミイの大切さを思い知つた…。

過ちに気づいた私は、自分を憎んだ…。

自分を守る事に必死で、ミイを守れなかつた…自分の不甲斐無さ。

後悔の日々が続いた…。

食事してる時、寝る前、夢の中できえ後悔している自分がいた。

その日も、憂鬱な気分で宿題に取り組んだ。

すると、またミヤの事を思い出して、自分への怒りが込み上げてきた…。

自分への怒りを何処にぶつけていいのか判らなくなっていた私はひたすら泣いていた。そして、その頃から鉛筆やコンパスで自分自身を傷つけるよになつた。

ミイが学校に来なくなつてから、約一週間後。ミイから電話があつた。

私は自分の過ちなど、全て本当の事を話し、「本当にごめんね…」心から謝つた…。

次の日、ミヤはこんな私を許してくれた…。

それと同時に悩み事など色々な事を話してくれたよになつた。

あの頃の私は、毎日元気と輝いていた様に思える…。

一年生の冬。

いつもの様に私とミイは苦手な体育をサボつて、  
体育館裏で早弁していた。

「やだよーーーだつて愛音のヒルの山中焼をマズイもん…」

いわなり、ミイが叫んだ！

「いや、さういふことはない。」

そこには、長い触角をこちらに向か

「ぎやああああ～ッ！！！！！」一瞬、凍りついたあと、慌てて

× ええ、言葉にならない言葉で叫んでた

數日後

突然の事だった

最後の日。

その日は、めずらしく学校が昼に終わつた。

いふは内緒で、三起しの総社へが部屋に連れてきてくれた。

ふたりで、弁当を開けた。

あ……。また玉子焼きだ……。

ミイは私の弁当を見てクスクスと笑つて話だした。

「まだ、玉子焼きだ〜〜〜やうこや、こないだ麩笛の玉子焼き行け  
ブリに食べられたよね〜」

私は、ぼーっと考え方をしていた……。

今は普通にハイとこるナビ、もう今日で最後なんだよね…。

本当に、実感がわからなかつた。

「あ……ああ～！～～」不意にハイが叫んだ！！！

え？！……ナニ？！？

いのこ、私も思わず叫んだ！

半泣きになりながら言んでいた

「あーーー！」あん、『あんー。だって、愛音はーつとしきゃわなんだもんーーー！』

「あーーそういうや、あそこの壁に山野先輩の拡大した写真はつてた  
よね。」

と私は笑顔で話す。

「そ、そ、う、！、！、集合写真拡大して張つたんだよネ、！、！」ミイも笑顔で答える。

それが、じめへ講が続いた。

私は何か話そうと必死で思い浮かべようとしたが、なかなか思い浮かばない…。いつもなら、何でも話せるのに…。

やつしてみると、いきなりミライが泣きだした……

「私もだよ～…。」

ミイとのいくつもの思い出が頭の中を駆け巡り、自然と涙がこぼれ落ちていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4445a/>

---

With You...

2010年11月12日20時14分発行